

「交易の時代」の港市国家マラッカ：  
空間軸と時間軸から考える

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岩井, 淳 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00006821">https://doi.org/10.14945/00006821</a>

## 「交易の時代」の港市国家マラッカ

——空間軸と時間軸から考える——

岩井 淳

### はじめに——マラッカを旅して

2010年12月、私は都市マラッカを初めて旅した。同行は、社会学科人間学(哲学芸術論)の上利博規氏と歴史学(中国近現代史)の戸部健氏だった。私たち三名は、人文学部アジア研究センターの研究テーマ「海域アジアの文献研究とフィールド調査」の一環として、12月18日に成田からクアラルンプールに入り、19日は同地を調査したのち、20日にマラッカへ移動した。

初めて見たマラッカの印象は、雑多な民族や宗教、文化が混在する「不思議な町」というものだった。着いてすぐに船に乗り、マラッカ川を海に向かって下りながら、街を概観した時は、あまり変哲のない南国の観光地のようにも思えた。しかし、町の西北にあるチャイナタウンに移り、歩いて調査を開始すると、多数の宗教や文化が同居している風景がパノラマのように開け、新鮮な驚きとともに街並みに魅了されていった。最初に訪れたのは、マレーシア最古の中国寺院、チェン・フン・テン寺院(青雲亭)だった。その起源は17世紀にさかのぼり、1646年にわざわざ中国から資材を運んで建てられた。本堂の中には線香の煙が充満し、ひっきりなしに参拝者が訪れ、今も篤い信仰の対象となっていることが理解できた。そこから数10メートル歩くと、カンポン・クリン・モスクというイスラーム寺院が忽然と姿を現す。この寺院は、天を衝く白亜のミナレットとともに、三層からなるスマトラ様式の緑の屋根をもつ美しいモスクで知られ、1728年に創建された。その隣に移動すると、今度は日本では、ほとんどお目にかかれない珍しい寺院に遭遇する。スリ・ポヤタ・ヴィナヤガ・ムーティ寺院というヒンドゥー寺院である。この寺院は、1781年に建てられたマレーシア最古のヒンドゥー寺院で、マレーシアに移民してきたインド系住民のために建てられた。

このようにわずか数10メートルの範囲内に中国寺院とイスラーム寺院とヒンドゥー寺院が混在しており、その歴史も17世紀や18世紀にさかのぼることができる。宗教と文化の多様性は、当然、多様な出身地域の移民がマラッカにやってきた歴史を想起させる。その思いは、午後から町の中心部を歩いて調査するなかで、いつそう鮮明になってきた。町の中心部は支配者の歴史に彩られていた。マラッカの中心地セント・ポールの丘の上にそびえ立つのは、1521年、ポルトガル人によって建てられたセント・ポール教会である。日本にキリスト教を伝えたことで知られるフランシスコ・ザビエルが亡くなった後、ここに遺骨が9か月間安置されたこともあり、ザビエル像が教会の正面に立っている。この教会は、1511年にポルトガル人がマラッカを占領し、香料貿易を独占しながら、カトリックの布教に着手したことを物語る。

しかし、ポルトガルの支配は長続きしなかった。1641年にはマラッカの新たな支配者としてオランダ人が登場する。その足跡は、セント・ポール教会から下った場所にある現在のマラッカの中心地「オランダ広場」にくっきりと残されていた。この代表格が、オラン

ダ総督らが居住するために、1650年に建設されたスタダイスである。この建物は、東南アジア最古のオランダ建築で、現在は歴史博物館となっている。スタダイスがオランダ人の世俗的な支配の場とすれば、宗教的な権威を示すのが、1753年に建てられたムラカ・キリスト教会であろう。当初はオランダ・プロテスタント派の教会であったこの建物は、現在はイングランド国教会のものとなっている。スタダイスとキリスト教会は、ともにオランダの町でよく見かけるレンガ色に彩色され、マラッカがオランダ支配下でも繁栄を続けた往時を偲ばせてくれる。

だが、そのオランダ支配も永続はせず、マラッカは、1795年、イギリス東インド会社に占領される。その痕跡は、ヴィクトリア女王の即位60周年を記念して、建造されたオランダ広場の時計台や噴水に刻印されている。イギリスの支配は、1942年の日本占領などを間にはさみながら、1957年のマラヤ連邦成立まで継続する。マラッカの町の中心部には、このように支配者としてヨーロッパからやって来たポルトガル人、オランダ人、イギリス人の足跡が色濃く残されていた。中心部だけでなく、周辺部まで目を向けると、マラッカの繁栄を底辺から支えたマレー人や中国人、インド人の姿が浮かび上がる。中でも忘れてならないのが、住民の半分以上を占めるマレー人の存在である。ポルトガル人が到来する前にマラッカ繁栄の基礎を築いたのが、1400年ころにマレー人が建国したマラッカ王国であった。マラッカ王国は、15世紀初頭に中国の明朝の後ろ盾を得ながら安定し、宗教的にはイスラーム教を取り入れ、香料貿易を独占した。交易を中心とした都市国家は、近年「港市国家」と呼ばれているが、港市国家マラッカの歴史は、マラッカ王国から始まった。

このようにマラッカは、500年ほどの歴史の中で、次々に支配者を変えながら、多種多様な人々を引きつけ、港市国家として発展してきた。そうした重層的な歴史が、複合的な都市空間を形成してきたとも考えられる。以下では、マラッカを旅して強烈に印象に残った「雑多な民族や宗教、文化が混在する不思議な町」という謎を解くため、マラッカの歴史をさかのぼり、15-16世紀の港市国家マラッカの特色を解明してみたい。この地は、なぜ、雑多な民族を集め、多様な宗教と文化を同居させてきたのか、その魅力は、どんなところにあったのか。マラッカの統治は、どのようになされ、ヨーロッパ人の支配によって、どのように変容したのか。こうした問いを意識しながら、史料と文献による考察を行う。その際、二つの分析軸を設けた。インド洋とシナ海を結びつける広範な交易圏という空間軸と、15世紀のマラッカ王国以来の港市国家の歴史という時間軸である。この二つの軸を設定することによって、空間を駆けめぐり、時間をさかのぼる「もう一つの旅」に出かけてみよう。

## 1 視点と史料——海洋史観とトメ・ピレス『東方諸国記』

本稿で設定した空間軸は、海洋史観という歴史の見方と深く関連している。そのため本論に入る前の予備的作業として、海洋史観という視点が、研究史上、どのような形で登場し、どのような意味をもっているかを確認しておこう。あわせて、本稿で中心的史料として用いるトメ・ピレス『東方諸国記』についても解説を加えておきたい。

海洋史観は、これまでの歴史学で支配的であった一国史観に見られるタテの時系列というよりも、国境をこえるヨコの相互交流を重視する見方である。その発端は、16世紀の地

中海を舞台に、従来の一国史では見えない歴史を、地理的な時間、社会的な時間、個人的な時間という三つの時間概念を駆使して描き出したフェルナン・ブローデルの『フェリペ二世時代の地中海と地中海世界』(1949年)に求めることができる。その後、海洋史観は、他の海を舞台にした研究にも転用され、概念的にも豊かになっていく。地中海は古代から中世にかけて重要な意味をもっていたが、16世紀以降にヨーロッパと異文化が接触するなかで、世界史という場の主役に躍り出るのは、大西洋とインド洋である。

海洋史観は、とりわけ大西洋を舞台にした研究において顕著な成果を上げてきた。この見方は、大西洋を往来したヒト、モノ、情報の流れを追跡し、ヨーロッパからアメリカという一方だけでなく、双方向での交流史研究が進展している。大西洋世界史は、世界システム論を主張したI・ウォーラステインによっても採用されたが、最近では宗教史や政治史にも広がり、17世紀や18世紀の大西洋横断的なアプローチが成果を上げている。私も、少し前に出版された書物<sup>1</sup>で、17世紀の大西洋を行き来した千年王国論などの宗教思想に着目して、ピューリタン革命の国際的背景を検討した。政治史では、18世紀のアメリカとフランスとハイチを結ぶ「大西洋革命論」などが提起されている<sup>2</sup>。具体的な研究と並んで、海洋史観の理論的な考察も進み、また奴隷貿易などを通してアフリカ大陸も大西洋世界の海洋史に組み込まれている<sup>3</sup>。この地域の特色として指摘できるのは、アメリカ植民地が、資本主義的な経済システムだけでなく、キリスト教などを受容し、その支配者も、ヨーロッパ人が現地生まれの白人(クリオーリョ)が務め、言語も、英語やフランス語、スペイン語、ポルトガル語といったヨーロッパ系言語を採用したことから分かるように、ヨーロッパ的価値観を受け入れることが多かったことである。

他方、海洋史観は、インド洋からシナ海域を中心にした海域アジア史でも重要な意味をもち、貴重な成果をもたらしている<sup>4</sup>。わけても東南アジア史研究において、海洋史観は決定的な意義をもつことになった<sup>5</sup>。東南アジア地域は、多くの民族が混在し、相互に征服や被征服を繰り返しており、特定の民族の系譜をたどることが困難な場合もあり、従来の一国史観が、必ずしも有効な指針とならなかった。しかし、国際的な交流に着目した場合、

1 岩井淳『千年王国を夢みた革命』講談社選書、1995年。

2 川北稔編『岩波講座世界歴史 17 環大西洋革命』岩波書店、1997年; D. Armitage and S. Subrahmanyam(eds.), *The Age of Revolutions in Global Context, c.1760-1840*, Basingstoke, 2010. 後者の論文集は、大西洋革命論を中心にし、さらに南アジア、東南アジア、中国の社会変動を扱っている。

3 D. Armitage and M. J. Braddick(eds.), *The British Atlantic World, 1500-1800*, Basingstoke, 2002; Bernard Bailyn, *Atlantic History: Concept and Contours*, Cambridge, Mass., 2005 [和田光弘・森丈夫『アトランティック・ヒストリー』名古屋大学出版会、2007年]。

4 日本でも、川勝平太『文明の海洋史観』中央叢書、1997年や白石隆『海の帝国』中公新書、2000年において海洋史観が提唱された。川勝著のタイトルは、梅棹忠夫『文明の生態史観』中公叢書、1967年を意識してのものである。ただ川勝著は、海洋史観と言いながらも、実際に対象となるのはイギリスと日本であり、海域アジアには、あまり論及されず、大西洋世界には、まったく言及されていないという問題点がある。

5 東南アジア史の研究動向については、池端雪浦「東南アジア史へのアプローチ」同編『変わる東南アジア史像』山川出版社、1994年; 桜井由躬雄「東南アジア史の四〇年」東南アジア学会監修『東南アジア史研究の展開』山川出版社、2009年などを参照。

東南アジアは、インド洋とシナ海域を結びつける枢要の地として新たな意味を帯びてくる。そこでは、古代以来、港市国家と呼ばれる都市国家が商業ネットワークの結節点となっており、上座部仏教やヒンドゥー教、イスラーム教といった宗教が東南アジアに流入する窓口の役割も果たしてきた。

東南アジアが、世界史的に見ても重要な位置を占めるのは、とくに15世紀から17世紀の「交易の時代」である。この時代を「交易の時代」と呼んで、東南アジアを海洋史観から考察した代表的な研究が、1988年と93年に出版されたカリフォルニア大学ロサンゼルス校のアンソニー・リードの二巻本『交易の時代の東南アジア』である<sup>6</sup>。リードの研究は、ブローデルの『地中海』の影響を受けており、彼の目的は、東南アジアを各国の集合体ではなく、ひとつのまとまった世界として描くことにあった。日本でも、リードと同じような視点に立つ研究は存在したが、リードはそれを体系化したと言えよう。本稿でも、リードの提言に従って、「交易の時代」という時代概念を用いて、マラッカの考察を進めたい。

これらの研究からもたらされた東南アジア像は、要約すると次のようになる。東南アジアは、ヨーロッパ勢力が現れる前に、すでに同質性をもつ地域として成立していた。リードの言葉を借りれば、東南アジアは「言語や文化の面で多様性に富んでいても、天候や自然や商業の面で多くの同一の力に従わなければならなかったので、非常に類似した、ひとつの物質文化を発展させてきた」<sup>7</sup>のである。東南アジアには、16世紀になると香辛料や胡椒を求めてヨーロッパ人が来航するが、それ以前に、この地域は、多様な民族や宗教をかかえながら、まとまっていたということになる。

次に、本稿で中心的史料として用いるトメ・ピレス『東方諸国記』(*Suma Oriental*)の解説に移ろう。この書物は、ポルトガル人トメ・ピレスによって1514年から15年ごろにマラッカで書かれたと推測される。筆者のトメ・ピレスは1466年ごろにリスボンで生まれ、父の仕事を継ぎ薬剤師となり、一時は国王の王子アフォンソの薬剤師を務めていた。しかし、1491年に王子が亡くなると、彼もその職から離れる。その後、彼はインド在住の商館員に任ぜられ、1511年4月にリスボンを出発し、同年9月にインドのカナノールに到着する。奇しくも、この年の7月、ポルトガル人の総督アルブケルケがマラッカを占領したのは注目に値する。アルブケルケは、攻略したばかりのマラッカの重要性を十分認識しており、この地を治めるためインドからピレスを呼び寄せることを決めた。ピレスは、1512年にマラッカに赴き、「商館の書記兼会計掛および香料の管理人の職」に就き、ポルトガル領となったばかりのマラッカで活躍したことが知られる。彼は、マラッカを拠点としてジャワやスマトラの各地を訪れることもあり、香料を入手する仕事などに携わった<sup>8</sup>。

これらの経験は、ピレスが『東方諸国記』(正式題名「紅海からシナ人までを取り扱うスマ・オリエンタル」)を執筆するのに大いに役立ったと思われる。その後、彼は中国と正式の国交を開くための使節となり、1517年に広州経由で北京に赴いたが、結局、国交を開

<sup>6</sup> Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce, 1450-1680*, 2 vols., New Haven, 1988/93 [平野秀秋・田中優子訳『大航海時代の東南アジア』I・II、法政大学出版局、1997/2002年]。

<sup>7</sup> 同上書、I、xiv-xv頁。

<sup>8</sup> 生田滋「解説」、生田滋ほか訳注、トメ・ピレス著『東方諸国記』岩波書店、1966年、17-23頁。

くことはできず、帰途、広州で投獄された。その後の足跡は定かではないが、1524年に死去したようである<sup>9</sup>。『東方諸国記』は、16世紀初頭という時点でポルトガル人に分かっているアジア世界を体系的に記述したもので、「エジプトからカンバヤ〔インド西部のグジャラート地方〕までの諸国」「デカンからセイロンまでの諸国」「ベンガルからインドシナまでの諸国」「シナからボルネオにいたる諸国」「スマトラから香料諸島までの諸島」「マラッカ」という全六部構成をとっている。この書物は、「ポルトガル人の手になる最初の総合的なアジアに関する記述」<sup>10</sup>という評価を得ているが、記述の正確さという点から見たとき、特筆すべきはマラッカ王国に関する箇所であろう。ピレスは、直前まで存在したマラッカ王国の統治や商業について詳細に記しており、『東方諸国記』が、ポルトガル人の新支配者のための参考書として役立ち得るようなマラッカ史の権威ある記述となることを目指した<sup>11</sup>と考えられる。その意味で『東方諸国記』は、15世紀から16世紀初頭のマラッカ王国を知るために不可欠の史料であり、その後の史料が乏しいことを考慮すると、「交易の時代」のマラッカの実態を伝える第一級の史料と言えるだろう。

## 2 空間軸から見たマラッカ——「交易の時代」の拠点都市

東南アジアを中心にした海域アジアには、15世紀末以降にポルトガル人、オランダ人、イギリス人などが相次いで来航した。しかし、ヨーロッパの影響は点に限られ、面に広がることはなかったと言える。当初、ヨーロッパ人は、海域アジアの港市国家を拠点にするが、現地の支配者の協力を仰ぐことが不可欠であった。ここで想起されるのは、16世紀に日本に伝来した鉄砲やキリスト教は、いずれも東南アジアや中国の港市を經由して、もたらされたことである。例えば、1542年に種子島に到来した鉄砲は、西洋式の船に乗ったポルトガル人が日本人に直接伝えたと思われがちだが、それは間違っている。実は、ポルトガル人は、タイのアユタヤから中国式のジャンクに乗せてもらい、密貿易に参入しようとしたが、嵐に遭ってたまたま種子島に漂着した。1549年に鹿児島に到着したフランシスコ・ザビエルも、直接ヨーロッパから来たのではなく、インドのゴアを基地にインド布教をおこなった後、マラッカで鹿児島の人アンジローと出会い、中国人のジャンク船に乗せてもらって、キリスト教を伝えた。このようにヨーロッパと日本の間には、東南アジアや中国が介在していたことを忘れてはならない。海域アジアは、西洋史とアジア史と日本史を結びつける、言葉を換えればヨーロッパ研究とアジア研究と日本研究を橋渡しする格好の領域とすることができる<sup>12</sup>。

話を元に戻そう。東南アジアなどの港市支配者は、仏教やイスラーム教を奉じることが多く、それらを周辺地域に伝えた。大西洋世界とは異なり、海域アジアでは、ヨーロッパ人が直接支配者となることが少なく、在地勢力が長続きし、影響力を保った。言語の面でも、ヨーロッパ系の言語がすぐに普及することはなく、現地の言葉が存続した。19世紀以

<sup>9</sup> 生田滋「解説」、同上書、18-21頁。

<sup>10</sup> 生田滋ほか「あとがき」、同上書、611頁。

<sup>11</sup> B. W. Andaya and L. Y. Andaya, *A History of Malaysia*, Second Edition, Basingstoke, 2001, p.34.

<sup>12</sup> 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』岩波書店、2008年などを参照。

降、ヨーロッパ勢力が植民地を広げる中でも、港市支配者や首長といった在地支配者が大きな役割を發揮した。海域アジアでは、16世紀以降のグローバル化の流れに対して港市国家のようなミニ・システムが、ある程度まで存続した。そこに大西洋世界と海域アジアの顕著な違いがあると考えられる。ここまで枠組みに関わる理論的な話を続けてきたが、以下では東南アジアを中心に海域アジアの実態を具体的に提示し、結節点となったマラッカの特色を明らかにしていきたい<sup>13</sup>。

図1「交易の時代の交易圏」を参照すると、東南アジアは、インド洋交易圏、ジャワ海交易圏、シナ海交易圏という三つの交易ルートを中心部分に位置していることが分かる。このうち、インド洋交易圏は東アフリカからアラビア海、ベンガル湾、マラッカ海峡までの海域で、さらにアラビア海交易圏とベンガル湾交易圏に区分できる。ここはアラビア語を話すイスラーム商人の活動によって支えられており、ダウ船と呼ばれる三角帆をもつ外洋船が往来していた。次にジャワ海交易圏は、マラッカから東インドネシアにいたるジャワ海と、その北のシャム湾(タイランド湾)を中心とした海域で、ブラウ船と呼ばれるマレー人の船によって特徴づけられる。

シナ海交易圏は、インドネシアから台湾、琉球をへて日本に至る海域で、さらに南シナ海交易圏と東シナ海交易圏に分けられる。ここでは中国人の商人と角型の帆をもつジャンク船が往来していたが、明朝が海禁政策を強めると、多数の中国商人の活動は非合法となり、密貿易が横行することになる。明朝は、15世紀初めに3500隻の船舶を擁していたが、永楽帝の没後しばらくし、膨張策を放棄してからは、1440年までに、その数を半減させ、1500年には三本マスト以上の船を建造した者は死罪に処せられることとなった<sup>14</sup>。

交易品は時代によって異なるが、15世紀から17世紀の「交易の時代」について見ると、東南アジアからの輸出品は胡椒、シナモン、ナツメグなど香辛料や熱帯産品、金・銀・銅などの貴金属、輸入品はインドの綿製品、中国の生糸、絹織物、陶磁器、銅銭、日本の金銀などである。東南アジアは、圧倒的に輸出超過の状態にあり、ヨーロッパは銃・火薬などを除いて、東南アジアが欲する重要な商品をほとんどもっていなかった。その意味で、ヨーロッパ人にとって、東南アジアは必要な物資をもたらす「羨望の地」であった。

これらの貴重な商品が、16世紀になるとマラッカに集中するようになる。その理由は、マラッカの立地上のメリットに求めることができよう。トメ・ピレス『東方諸国記』は、この点を雄弁に語っている(以下、引用の際には、375-376頁のように記して、邦訳書のページを示した。ただ、史料として原意を忠実に伝える必要がある場合などに、邦訳書の訳文を一部改変した箇所がある)。

マラッカのような盛んな寄港地は知られていないし、またこれほど立派で珍重される商品を取引する場所も知られていない。ここには東方全体から来た高価な品物が見られ、西方全体から来た高価な品物が売られている。マラッカのいろいろな事柄は非常に重要で、非常に有利で、非常に名誉なものであることは疑問の余地がない。この国は、その

<sup>13</sup> 以下の記述では、大木昌「東南アジアと「交易の時代」」『岩波講座世界歴史 15 商人と市場』岩波書店、1999年；鈴木恒之「東南アジアの港市国家」『岩波講座世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店、1998年を参照。

<sup>14</sup> 石井米雄「総説」『岩波講座東南アジア史 3 東南アジア近世の成立』岩波書店、2001年、5頁。

位置〔が良い〕ため、衰えるようなことは決してなく、常に大きくなって行くのである。マラッカは、季節風の吹き終る所にあるので、望むものは何でも、時には必要以上に多く手に入る(375-376 頁)。

マラッカは商品のために作られた都市で、世界中のどの都市よりもすぐれている。そして一つの季節風の吹き終わる所であり、また別の季節風が吹き始めるところである。マラッカは、〔世界に〕取り囲まれてその中央に位置し、千レグワも隔たった二つの国の間の取引と商業とは両側からマラッカにやってこなければ成立しない(493-494 頁)。

ピレスの説明は、マラッカのメリットを端的に物語っている。マラッカ興隆の基礎は、中継貿易にあり、その力は、マラッカ海峡のほぼ中央にあるという立地上の優位さから来ていた。マラッカが発達する前までは、インド洋交易圏とシナ海交易圏を結ぶ船は、東西両モンスーンの風待ちをしながら、目的地を往復するのに約2年を要したと言われる。ところが、マラッカが開港されると、例えば、中国方面からのジャンクは、東北モンスーンの終期にこの地を訪れ、商品を在地の商人に売り渡した後、西方の物資を積んで、南西モンスーンの始期に帰国すればよくなった。西方の商人は、その逆のパターンである。東西の物資は、それぞれ約半年間、マラッカで寝かされた後、東西の商人に売り渡されたが、各商人にとって、これまでよりも約半年間、時間の節約が達成された。マラッカでの東西物資の交換が、時間の節約をもたらし、どれほど各商人の利便性を増したかは、計り知れない。同時に、出入りする貨物に課せられた関税や半年間の物資預かりが、マラッカ王国の利益となって、もたらされた。東西流通の分業が、マラッカを介して効果的に機能したのである<sup>15</sup>。

実際、『東方諸国記』は、マラッカに引き寄せられた人々が、いかに多様であったかを例示している。ピレスは、マラッカで取引した人々と彼らの出身地域を、次のように列挙した。

カイロ、メッカ、アデンのイスラーム教徒、アビシヤ人、キルワ、メリンディ、オルムズの人々、ペルシア人、ルーム人、トルコ人、トルクマン人、アルメニア人のキリスト教徒、グザラテ人。シャウル、ダブル、ゴア、ダケン王国の人々。マラバル人、ケリン人。オリシャ、セイラン、ベンガラ、アラカンの商人、ペグー人、シアン人、ケダの人々、マラヨ人。パハンの人々、パタニ人、カンボジャ人、シャンパ人、カウシ・シナ人、シナの人々、レオケ人。ブルネイ人、ルソン人……(455 頁)。

ここに見られるのは、西では、アフリカからアラビア半島、ペルシア、インド西部のグジャラート地方、インド南部のゴアやセイロンを経て、マラッカに至った人々であり、東では、中国から東南アジアの大陸部や諸島部を経て、マラッカに至った人々である。どれほど民族的・宗教的に多様な人々が、東西交易のために、マラッカに集ったかが理解できるのである。

<sup>15</sup> 石井米雄・桜井由躬雄『東南アジア世界の形成』講談社、1985年、186-187頁。

### 3 時間軸から見たマラッカ——港市国家の特色と変遷

こうした東西交易で結節点の役割を果たしたのが、港市国家である。「港市国家」の概念は、日本では15世紀の初めに成立したマラッカ(ムラカ)王国を例として、1982年に和田久徳によって提唱された<sup>16</sup>。和田の論文は、マラッカの研究自体が乏しい中、史料に即して堅実な分析を行った代表的な先行研究である。彼は、海上交通の要衝たる地点に海港ができ、その港の貿易を中心に商業都市が発展し、さらに周辺地域を含んで都市国家が形成されたと論じた。これとは別に、1990年に論文集『東南アジアの港市と政体』を編集したカティリタンビ=ウェルズは、農業社会と商業社会を媒介するものとして港市国家を位置づけ、東南アジアでは紀元前から19世紀まで、それが通時的に存在したことを強調した<sup>17</sup>。

確かに、カティリタンビ=ウェルズが言うように、港市国家は、1世紀から7世紀まで存続したメコン川下流のオケオや7-11世紀に栄えたスマトラ島のパレンバンなど、古くから存在した。しかし、それは、15-17世紀の「交易の時代」に圧倒的に重要な役割を果たしたことを銘記すべである。この時代の港市国家としては、大陸部のペグー、アユタヤ、マレー半島のパタニ、マラッカ(ムラカ)、ジョホール、スマトラ島のアチェ、ジャワ島のバンテン、ドゥマック、スラウェシ島のマカッサルなどが知られる(図2「15-17世紀の島嶼部における主な港市・政治的中心」を参照)。またヨーロッパ人が来航して、早くから拠点とした港市国家は、バタヴィアやマニラなどであった。

その中でもマラッカは、前述したように15世紀に急速に興隆した。『東方諸国記』は、1400年ころと推定されるマラッカ建国を、パレンバン出身の貴族パラミスラと彼に従う30名の漁民を主体として、以下のように説明する。港市国家マラッカの誕生が、漁業を生業とする「海の民」と深くかかわっていることを伝える興味深い個所である(図3を参照)。

パラミスラがパレンバン〔現在のパレンバン〕に住んでいた期間には、彼らは漁業に従事し、シンガプラ〔現在のシンガポール〕に行ってから、海峡の近くにあるカリマン島に住んでいた。そしてパラミスラがムアルに赴くと、この30名もやって来て、今日マラッカと呼ばれている場所に住んでいた。ムアルからマラッカの町までは、約5レグアの距離である(385頁)。

マラッカは、建国して間もなく、シャムの支配を受けていたが、1405年に始まる鄭和の大艦隊が東南アジアに派遣されると明の朝貢国となり、1450年ころにはイスラーム教を受け入れ、自立化する。マラッカは、インド洋交易圏、ジャワ海交易圏、シナ海交易圏の結節点に位置するという有利な立地を生かし、港市国家として飛躍的に発展し、多種多様な人々を集めた。注目すべきは、対外的に開かれたマラッカの特色を反映して、この地には「シャバンダール」と呼ばれる4人の港務長官が置かれたことである。「シャバンダール」には、居留外国人が就くことになっていた。『東方諸国記』は、この役人について信頼できる記述を残している。

マラッカには、4人のシャバンダールがいる。彼らは、市の役人で、それぞれの管轄

<sup>16</sup> 和田久徳「東南アジアの都市と商業」『中世史講座3 中世の都市』学生社、1982年。

<sup>17</sup> J. Kathirithamby-Wells and J. Villers (eds.), *The Southeast Asian Port and Polity*, Singapore, 1990.

に従ってジュンコ〔と呼ばれた船〕の船長を応接する人々である。彼らは船長をベンダラに紹介し、彼らに倉庫を割当て、商品を受け取り、もし彼らが手紙をもっていれば、彼らを宿泊させ、象に命令を与える。グザラテ人のシャバンダールは、他の誰よりも重要である。またブヌア・キリン、ベンガラ、ペゲー、パセーのシャバンダール、ジャオア、マルコ、バンダン、パリンバン、タンジョンブラ、ブルネイ、ルソンのシャバンダール、シナ、レオケ、シャンシェオ、シャンパのシャバンダールがいる。人々は、マラッカに来た時には、それぞれの国籍によって商品あるいは贈物を持って〔シャバンダールの所に〕出頭する(448頁)。

上記の引用から分かるように、「シャバンダール」という名の港務長官は、それぞれ、①インド西部のグジャラート地方、②インド西岸のマラバルやインド東部のコロマンデル、ベンガルなどの地域、③東南アジアの島嶼部、④中国や琉球といった東アジア地域を担当した。このうち①と②はインド洋交易圏に、③はジャワ海交易圏に、④はシナ海交易圏に対応することになる。このうち、①や②のように西方から来る商人と④のように東方から来る商人の待遇には、顕著な違いがあった。『東方諸国記』は、西方と東方の商人に課せられた税金などの相違について、次のように述べている。

彼らは「西方の人」と呼ばれる。彼らは誰であっても、マラッカで百分の六〔の税金〕を支払う。マラヨ人やその他の商人は、こうした仲間を作らないで、妻を連れてマラッカに定住するためにやって来る。彼らは、百分の三を支払っていた。そして、この外国人に対する百分の六、土地の人に対する百分の三の王国の税金の他に、彼らは国王、ベンダラ〔マラッカの高官〕、トムンゴ〔マラッカの市長〕、それぞれの民族の〔所属する〕シャバンダールに贈物をする(462頁)。

この時代、東南アジアの諸港における関税は、通常12%ほどだったが、マラッカは、ベンガル湾よりも西から来た商人には、積み荷に6%の関税を課し、若干の貢物を要求したのである。それだけでも良い条件であったが、さらに中国や琉球など東方から来る商人には、破格の好条件が提示された。

東方の諸国は商品の税金を支払わず、ただ国王と顕官に対して贈物をするだけである。すなわち、それはパハンとシナに至るまでのあらゆる場所、ジャオア、バンダン、マルコの島々、パリンバンおよびソモトラ島のあらゆる場所である。贈物は妥当な額で、税金のようなものである。〔これらの〕評価をする徴税官がいた。これは一般に習慣となっていて、シナからの贈物は他のどの地方のそれよりも立派であった。そしてこれらの贈物は極めて多額に達した。これは贈物を支払う航海者の数が多かったからである(464頁)。

ここに記された「贈物」が「税金のようなものである」ことを考慮すると、全くの免税とは言えないかもしれないが、関税を免除された東方の商人が、破格の好条件で迎えられたことは確かである。なぜ、西方の商人と東方の商人は、異なった条件で処遇されたのであろうか。その理由としては、東南アジアとほぼ同緯度に位置するインド洋交易圏から来る西方の商人が、マラッカにとって、さほど珍しくない商品をもたらすのに対して、シナ

海交易圏から来る東方の商人が、温帯地域である中国・日本から極めて貴重な商品をもたらす傾向にあったことが考えられる<sup>18</sup>。しかし、いずれにしても、マラッカが「自由貿易港」と呼べるような好条件を、西方の商人にも東方の商人にも示したことに間違いはないだろう。

マラッカは、このように外来の商人に好条件を示し、時には外国人を港務長官として採用するなど、統治面でも彼らを活用した。しかし、その支配の頂点には、絶対的な権限を持つ国王がいたことを忘れてはならない。

どのマンダリも、国王に謁見に行く時には、十歩以上彼に近づくことはできない。彼らは両手を頭上に三回上げ、さらに床に接吻し、話したいと思うことを第三者を通じて彼に話す。退出に際しても、またこのようにする。彼らは王が姿を見せる日を知っている。彼らは王子に対しても、また同じようにする。人々は、王とその所持品に対しては最大の敬意を払う。普通の人々が王の邸宅のすぐ近くを通り過ぎる時には、彼らはそれに向かって敬礼する(453-454頁)。

このように国王は、絶対的な権限をもっていた。また「商人が直系の相続者を持たずに死ぬと、王はその財産を没収する」(452頁)ことになっており、富は国王のもとに集中される仕組みになっていた。マラッカは1450年ころにイスラーム教に改宗したが、国王は「スルタン」の称号をもち、イスラーム教を広め、東南アジアの各地をイスラーム化するのにも貢献した。国王の周辺には、主要官職を世襲的に独占する貴族が存在していた。主要官職は文官と武官に分かれていたが、彼らが商業活動に乗り出すことはほとんどなかった。

要するに港市国家マラッカには、主として国内と外来の商人たちが営む商業と、国王と貴族たちが担う政治という二つの領域があり、その両者が住み分ける構造になっていたのである。この傾向は、東南アジアの他の港市国家にも見ることができる。政治的支配者は、臣下が商人となって直接交易することを恐れ、法的にそれができないように縛りがかかることがあった。代わりに商業活動で活躍したのは、アラブ人、インド人、中国人、トルコ人、ヨーロッパ人といった外国人たちであった<sup>19</sup>。

こうして16世紀に東西の交易ネットワークは、マラッカへ一極化した。しかし、その繁栄は、ポルトガルによる1511年の軍事占領によって変化し、多極化の時代へ向かった。マラッカは、さらに1641年、ポルトガルに代わってオランダの支配を受けることになる。新しい拠点として、パタニ、ジョホール、マカッサル、アチェ、バンテンなどの港市国家が台頭し、その他にペグー、アユタヤ、バタヴィア、マニラなどが成長する。1819年、イギリス人トマス・ラッフルズによって建設されたシンガポールも、港市国家の形態をとったことを付記しておきたい。

## おわりに——まとめとマラッカの行方

以上、予備的作業として海洋史観が登場した文脈を探り、中心的史料として用いた『東

<sup>18</sup> 大木昌・前掲論文、111-112頁。

<sup>19</sup> 同上論文、117頁。

『東方諸国記』について解説を加えた上で、インド洋とシナ海を結びつける広範な交易圏という空間軸と、15世紀のマラッカ王国以来の港市国家の歴史という時間軸を設定し、歴史をさかのぼり、15-16世紀の港市国家マラッカの特色を解明してきた。その結果、明らかになったのは次のようなことである。

マラッカは、立地上の優位さもあって、15世紀にインド洋交易圏とシナ海交易圏を結ぶ交易の拠点都市として興隆した。トメ・ピレスが記述したように、15世紀以来、マラッカには、西からも東からも多様な宗教や文化をもつ多くの民族が引き寄せられたのである。マラッカ王国は、その起源を1400年ころにもち、「海の民」の力を借りて建国された。この王国は、中国明朝の後ろ盾を得、イスラーム教を取り入れることによって、対外的に安定し、港市国家として発展した。マラッカ王国は、政治面で、絶対的な権限をもつ国王や世襲で有力官職を独占する貴族が存在した一方、商業面では、交易が外来商人に幅広く開放されるという二元的構造をとっていた。とくに4人の港務長官は在留外国人から任命され、関税が他の港市国家と比べて低く設定されるなど、外来商人には好条件が示され、交易の拠点として発達するのにふさわしい政策が実施された。

しかし、マラッカ王国には、ある欠点が存在していた。それは、政治と商業が相対的に独立して営まれたため、外来商人の中にはマラッカ国王や王国に忠誠心をもたない者が存在しており、交易の発展とともに、そうした人々が増加したことである。トメ・ピレスは、『東方諸国記』の末尾で「ポルトガル人による占領」を説明し、この欠点がマラッカ王国の決定的敗因になったと論じている。

総司令官にしてインディア総督のアフォンソ・ダルボケルケ〔アルブケルケ〕は、紀元1511年7月のはじめに、大小16隻の艦隊を率いて到着した。1600人前後の戦士がそれに乗ってやって来た。その時、マラッカでは10万人の兵士をコアラ・ペナジから内陸部まで〔の各地〕と、マラッカ市の境界のカサン〔までの地域〕から集めていたということである。……一方人々は、マラッカ王の意志に従わなかった。これは取引の行なわれる土地では、人々は異なった国の出身であり、これらの人々は他国民を交えていない土地の人々のようには、国王に対して愛情を持つことができないからである。このことは一般に見られ、マンダリたちは、できる限り戦ったのであるが、このために、マラッカ国王は〔人々から〕好意をもたれることがなかった(473-474頁)。

もちろん、ピレスによる記述は、占領したポルトガル人側のものであり、割り引いて考えなければならない。しかし、「10万人」と言われるマラッカ王国側の兵士に、わずか「1600人前後」のポルトガル戦士が勝利したのだから、従来指摘されてきた軍事的な装備の優劣以外にも、マラッカ側にあった求心力不足という点は考慮するに値する。マラッカ王国は、内的な要因もあって崩壊したと考えられる。

だが、マレー人の王国に代わるポルトガル人の支配は、以前のように機能しなかった。ポルトガルは、マラッカ王国の遺産を継承して、ヨーロッパ向け香辛料取引の独占体制を構築しようとしたが、マレー人はもとより、イスラーム系のグジャラート商人などの協力を得ることができなかった。そればかりか、マラッカ王家の血統を引くマレー半島先端のジョホールが、海上民の力を背景にして、ポルトガル領マラッカの対抗勢力として興隆するなど、複数の拠点が競い合う多極化の時代となるのである。

1511年に始まったポルトガル人によるマラッカ支配は、1641年、オランダ人の支配にとって代わられた。こうした支配者の変化によって、港市国家マラッカの政治と商業は、どのように変化したのであろうか。この点については次の課題として残しておき、今後も港市国家マラッカの行方を見つめていきたい。

(2011年2月17日)

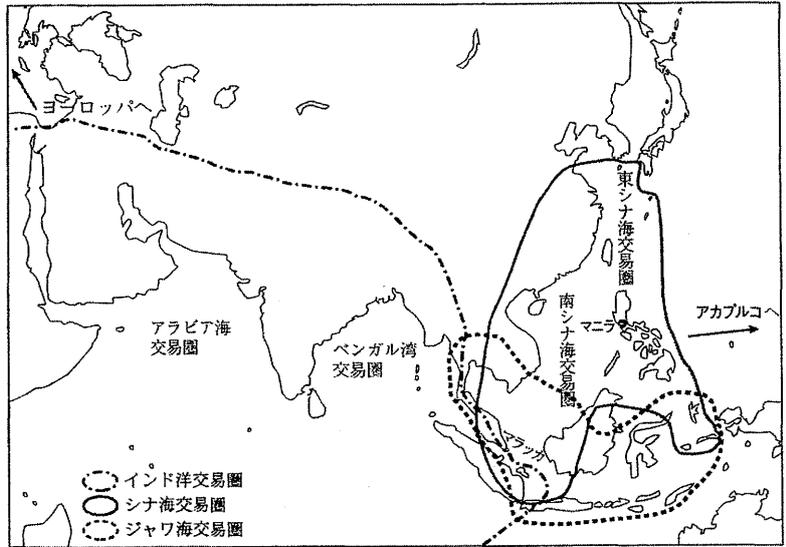


図1 交易の時代の交易圏

出典) 大木昌「東南アジアと「交易の時代」」『岩波講座世界歴史 15 商人と市場』岩波書店、1999年、108頁。

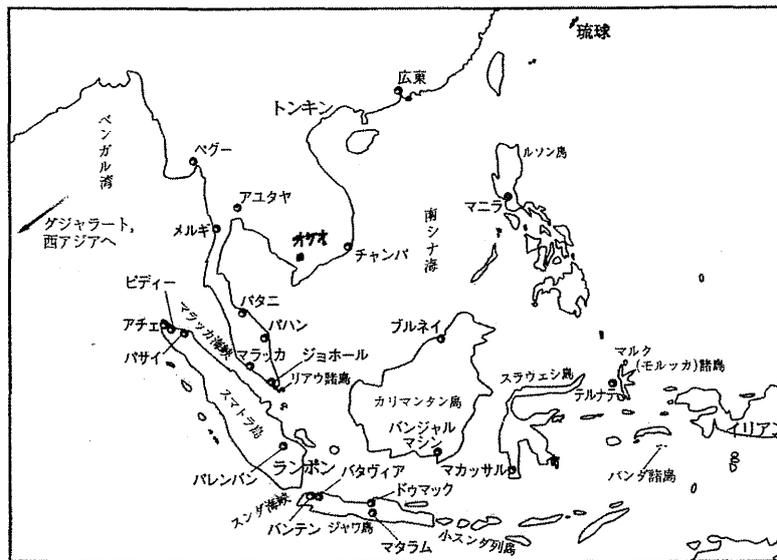


図2 15-17世紀の島嶼部における主な港市・政治的中心

出典) 鈴木恒之「東南アジアの港市国家」『岩波講座世界歴史 13 東アジア・東南アジア伝統社会の形成』岩波書店、1998年、197頁。

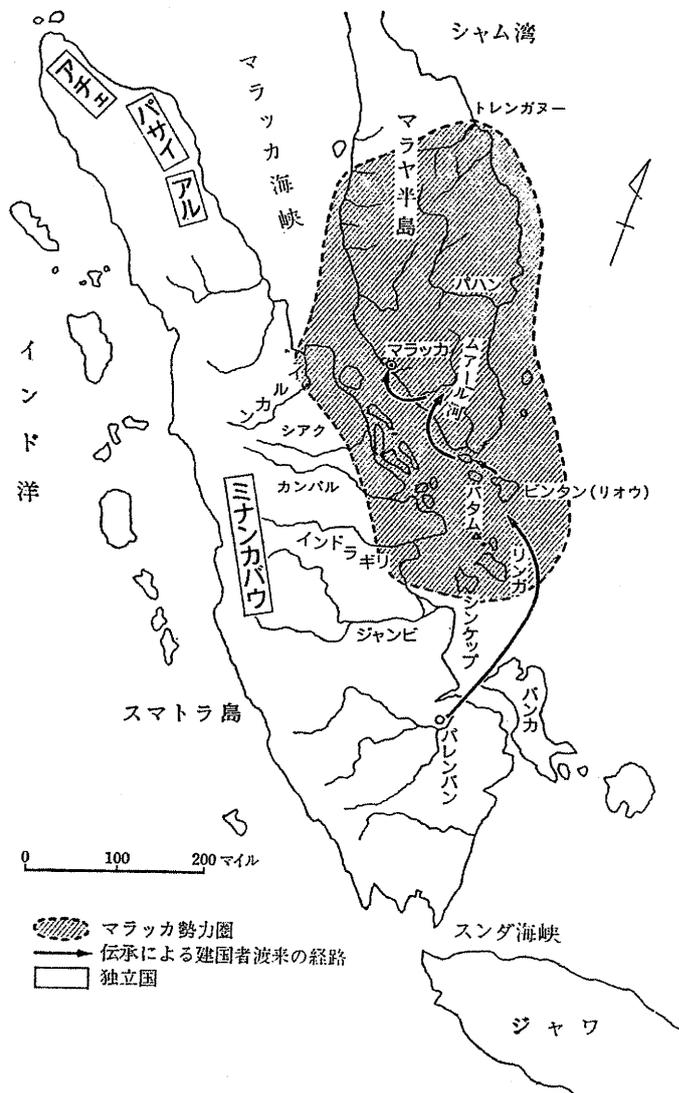


図3 15世紀のマラッカ王国

出典) 鶴見良行『マラッカ物語』時事通信社、1981年、114頁。